担当の女が、お待たせしましたぁ、と軽やかな笑顔とともに戻ってきた。いつまで待たせるの、と嫌味でも言いたくなるが、すんでのところで言葉を飲み込んだ。実のところは、奥歯がいまにも擦り切れそうである。こちらどうぞ、と目の前に置かれた珈琲が余計に神経を逆撫でた。

鬼が島に一軒しかない美容院は、いつ来ても混みあっていてうんざりする。島中の女たちがこぞって集まってきて、二個しかない鏡の前の椅子を取り合うのだ。ただでさえ客が多いのに、仕事を舐めているこの従業員と店主のみで回しているから、受付前の列は長くなる一方である。

「椅子を増やして、従業員を雇えばいいじゃない。儲かってんでしょ」

と、支払いとともに店主に言ってみたことがある。

「うちは、これでも精一杯。水道が安定しなくてシャワーを増やせないし、電気も足りないから」

というのが、店主の返答であった。あれから小一時間愚痴を聞かされた苦痛を思い出しながら、背後に立った女に、肩にかかる長さで、と伝える。わかりましたぁ、という間の抜けた返答とともに、側頭部の髪に櫛と鋏が入り込んできた。

「お客さん、顔立ちがはっきりしてるからパーマも似合いそうですよね」

従業員の言葉に、いや私はこのままで、と遠慮がちに手を振って愛想笑いをする。鏡越しに合っていた目線を逸らすと、隣の席では、店主が、若い女の髪を鰐の口のような縮毛矯正機で何度も挟んでいた。

ここ三年ほどであろうか。ストレートパーマは流行から定番となった。昔の女は、くるくるとした巻き毛を健康な鬼の証として誇ったものであるが、最近の若者たちは直毛を振り回して街を歩いている。何故こうも変わってしまったのか。洩れ聞いたところによると、人間への憧れということであった。

長年、人間は野蛮で、外見も奇妙な生き物として恐れられてきた。私が幼い頃は少しでも悪さをすると、おばあに、お前を人間の島にやってしまうよ、と脅されたものである。それが、いまでは人間のようになりたいという鬼が少なくないというのだから、時間の流れとは恐ろしい。

二十年前、鬼を征伐するという目的とともに突撃してきた人間たちは手強かった。人間は、酒呑童子や茨木童子などが如何に人間の生活を脅かしたかと高らかに謳い、鬼を罵倒し、凌辱し、攻撃した。あっという間に、鬼が島は人間の支配下となった。歴史の教科書も大きく塗り替えられ、私の世代では傲慢な荒くれ者という印象であった一寸法師も、いまでは生まれながらの逆境を乗り越えた英雄として子供たちに伝えられているという。そんな教育改革の甲斐あってか、パンツ一丁が当たり前であった男たちも上半身に布を纏うようになり、牙を削って平らな歯列を手に入れた若者もよく見かけるようになった。現に、いま自分の髪を切っている女も、わざわざ牙がない歯を見せつけるかのように微笑みかけてくるし、胸まで伸びた直毛を自慢気に揺らしている。しかも、角を隠すために帽子を被るほどの念の入れようである。

これが時代の流れだ。私も流行を追いかけて、衣服の縞模様を変えてみたこともあった。しかし。しかしである。老婆心かもしれないが、これでいいのか、と大声で叫びたくなる。

確かに、人間が鬼が島を支配した数年後からは、無意味に攻撃されることはなくなった。鬼が島を歩く人間の姿にも慣れてきて、外出の度に鬼たちが伏し目がちになることも今ではほとんどない。とはいえ、面の皮が厚い人間のことである。平気で嘘もつくし、感情的になると暴力に頼る人間を、こうも簡単に信じてよいものか。鬼が島侵略を食い止めようと夜な夜な話し合った鬼たちが島を囲うように建てた壁を、人間があらゆる武器で壊し、鬼たちの住居まで破壊した後の惨劇はまだ私の脳裏に焼きついている。あの

頃は、人間が大量殺戮を目論んでいるという噂で持ちきりになったものだ。結構な時が経って状況は変わったが、今の生活だって決して満足できるものではない筈である。主な電力源である雷は人間が発明した機械によって人間集落に多く落ちるようになっているし、鬼が島の中心を通る川の水も人間に搾取されている。元来、鬼は譲り合いの文化で生きてきた。それなのに、人間が持ち込んだ文明と思想によって贅沢が美徳とされ、富を掻き集める人間がカリスマとして崇め奉られるようになった。カリスマという人間由来の言葉を自然に使うようになった自分ですら何処か毒されているのかもしれないが、近年の鬼たちは洗脳されているようにしか見えないのである。

「一度シャンプーして、切った髪を落としますね」

いつの間にか散髪は終わっていて、軽くなった髪の毛が肩口で切り揃えられていた。さてシャンプー台へ、と立ち上がろうとした折に、ちょっと失礼しますね、と言い残して女は従業員控室に消えていった。

また待たされるのか、と思うと、自然に舌打ちが出た。どうせ男との電話だろう。従業員が人間の男と付き合っている、と店主が言っていた。人間の男などやめておけと言いたくなるが、年寄りの忠告など無視されるのが目に見えている。しかし、本当に人間の男の何処が良いのかわからない。あの生白い手で身体を触られて、何故恍惚となれるのか。自惚れの強い人間の男と付き合ったところで、暴言や暴力に晒された上で唐突に捨てられるのがオチである。そんな不合理な付き合いを望んでする上に、その男との電話を目の前の客よりも優先する女の軽薄さには辟易とするしかない。

「で、どうするの？」

背後で発された甲高い声が耳に突き刺さってきた。

「まだ決まってないけど、息子には迷惑かけられないから」

鏡に反射した自分の肩越しに、受付の脇で話し込む女たちの姿が見える。声が高いほうの女の顔は好奇心と野次馬根性で塗り固められ、これでもかとばかりに目鼻口が開かれていた。もう一方はもう一方で、少し身体を引きながらも、身上話に喰いつかれる心地よさが声と表情に滲み出ている。

「じゃあ、このままってこと？」

「うーん、このままかなぁ」

「相手はそれでいいって？」

「彼には旦那とは別れられないって伝えてあって、そこは理解してもらってるから」

「結婚だけでも羨ましいのに、理解が深いイケメン彼氏もいるなんて。めっちゃ贅沢」

「そんな、イケメンじゃないし、貧乏だから」

「でも人間じゃん」

「まあね」

ははははは、と声を合わせて笑い出した。

今まさに人間への恋心に現を抜かしている従業員に腹を立てているのに、こんな話を聞かされては一溜まりもない。笑っていられるのは今だけだぞ、と一喝してやりたくなる。鬼の嫁と人間の不倫。しかも子持ち。どの方向に事が転んでも、地獄絵図は避けられないだろう。

「旦那よりも近所のおばさんたちにバレると厄介だから、隠すのが大変で」

「わかる。暇なおばさんって何でも首突っ込んでくるし、昔の価値観押し付けてくるよね」

「彼と一緒にいると、私も人間だったらこんなことに悩まなくて済んだのかな、とか思うもん」
「確かに。私も生まれ変わるなら人間がいい」
　再び不愉快な笑い声が上がった。
　人間に生まれたかったなんて、少し前まではあり得なかったし、そんな奴が居たとしたら間違いなく村八分となった。沸々と湧き上がる怒りを抑えるために、目の前に置かれた珈琲に口をつけた。はあ、と溜息をつきながら小洒落た湯呑を置いたとき、どん、という音がした。女たちの話し声が止み、隣に座っている女も店主も完全に動かなくなった。全員が私の顔色を窺っている。静寂が建物を包んだ。違う。私じゃない。私は苛立ちを湯呑にぶつけたりなどしていない。
　どん、と再び音が鳴る。どん、どんどん、どんどんどんどん。
　建物全体が振動し、その振動が鼓膜から全身を揺らした。
　店主だけがゆっくりと動き出し、窓から外を覗いた時、ようやく壁に何かがぶつかっている音だと気が付いた。私も吸い寄せられるように立ち上がり、窓辺へと向かった。固まっていた女たちも、窓から差し込む光に群がる虫のように足を動かした。
　どん、どん、どん。
　轟く揺れに肺が縮まる。店主の肩越しに外を見た。
　そこには、犬がいた。犬は壁に身体をぶつけ、後ずさりをしては再度体当たりという動作を一心不乱に続けていた。犬の向こう側に目を向けると、赤い顔をした鳥と猿が次々と鬼たちを襲っては倒しており、更に離れたところでは鉢巻を着けた人間の男が高笑いをしていた。
　平穏を保っていた鬼が島は此処にはない。女たちはこの惨劇に対する打開策を求めるように目くばせを仕合った。例外なく全員の口は半開きである。先刻まで男と電話していた女も遠巻きに窓の外を見ていたらしく、従業員室の扉の前で固まっていた。誰もが、つい数分前まで脳味噌の大半を占めていた自身の容姿に意識は向かわず、只々外界で繰り広げられる非日常の出来事を見つめていた。
　鳥は嘴と羽を器用に使って鬼を仕留め、猿は人間の武器を我が物顔で振り回す。犬は阿呆の一つ覚えの如く、美容室に突進を続けていた。
　私たちの生活に何かが起こっている。しかし、何が起こっているのかが判然としなかった。
　納得はできないものの、人間が鬼を襲う理由はまだ理解できる。では、何故動物風情が私たちを敵視するのか。人間が動物の心情を操作したのだろうか。でも、戦場の中心にいるのは、一目見れば世間知らずとわかる人間の糞餓鬼である。何の動機もない動物を家来とするほどの能力も意志もある筈がない。では、どういう経緯でこのような無差別攻撃に至ったのか。いくら考えてみても、見当もつかなかった。
　どんどんどん、かっかっかっかっ。
　体当たりを続ける犬に目を奪われていたら、いつの間にか鳥がやってきていて、眼前の窓に穴を開けようとしていた。
　かっかっかっかっ、かかかかかか。
　窓の一か所に狙いを定めた鳥は、赤い頭を小刻みに動かし、目にも留まらぬ速さで嘴を窓にぶつけている。黒い点のような眼はこれでもかとばかりに見開かれ、よく見ると血走っていた。両手に収まりそうな大きさしかない鳥がこちらを見下ろしている姿には、私たちの恐怖心を増強するのに十分な迫力と殺気があった。

ばりん。

突然窓硝子が割れ、拳ほどの大きさの石が店内に入ってきた。はっとして窓の向こうに目をやると、遠くにいる猿が満面の笑みをこちらに向けていた。唇を捲るような笑顔によって強調された猿の歯には勿論牙はなく、自身が人間の一味であることを宣言しているかのようであった。そして、鬼を侮辱し、嘲笑しているようでもあった。

店内はというと、投げ込まれた石によって、充満していた緊張と沈黙が決壊した。こうなってしまうと手の付けようがない。ある者は扉から外に出ようとして友人に止められ、ある者は息子の名前を叫びながら涙を流し、従業員室にある電話に群がった者たちは電話を使う順番で口論を始め、激昂した若者が何故か電話線を切断したのを皮切りに暴力を伴う争いとなった。皆が皆、思い思いに奇声をあげては暴れ回り、棚に並べられていた装飾物が次々と割られ、床には硝子と陶器の破片が散乱した。

犬がぶつかる壁はひびが入り、鳥は窓の穴を広げて侵入を試みている。少し離れたところにいた筈の猿はこちらへ突進してきており、あの人間の男はというと、何やら唄を口ずさみながら小踊りしていた。このままでは侵入されてしまう。奴等がこの建物に入ってきたら、混乱の絶頂にある鬼など一瞬にしてやられるに決まっている。私は店主に向かって叫んだ。

「棍棒は？」

「そんなもの無いわよ！」

せめて金品だけでも、と受付で金を掻き集めていた店主はこちらを一瞥して怒号をあげた。確かに、鬼が島が人間の管轄となってから棍棒狩りが行われ、鬼たちが所持する棍棒は全て没収されていた。昔はどの家にもあった棍棒も、いまの若者たちにとっては昔話の小道具でしかない。

私は周囲を見渡した。仕方ない、ここは自分が抗わねば。私は大股で歩き、床に転がっていたストレートパーマ用の縮毛矯正機を拾い上げた。ずっと隣の女の髪を挟んでいた機械は熱を失っておらず、私の右手から右腕に熱を与えた。窓の外を睨みつけて、身体に力を入れる。

何故だ。何故、私たちは虐げられるのか。